

アトリエ 琉游舎 だより 159号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2023年8月16日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

膝の子や線香花火に手をたたく

一茶

- 線香花火が似合う季節は夏、特にお盆の頃。孫たちが集まりおじいさんおばあさんの膝に抱かれて庭先で線香花火をしている情景が目につかびます。ぱちぱちとはじける小さな火の珠が落ちないように静かに見つめる姿は、お盆に集まる一族が先祖供養をしているかのよう。
- 派手な音で色彩豊かに大きくはじける花火も子供には楽しいものですが、花火遊びの最後はやはり線香花火の珠がぽとぽと落ちる瞬間まで静かにじっと皆が見つめて終えるもの。音と色彩の競演が静かに幕を閉じた翌日、集まった一族はまた我が家へと各々帰って行きます。
- まだ昭和の時代にあったと思われるこんな光景はもうイメージの中にしかないのかもしれませんが。「膝の子や線香花火に手をたたく」小林一茶の句です。江戸時代にも線香花火があり同様に子供を膝に乗せて線香花火に興じる情景が描かれています。江戸時代から「た～まや～」「か～ぎや～」のかけ声があったように、大きな打上げ花火大会のようなものが開催されていたようですが、同じように庭先で家族が線香花火を楽しむこともあったのでしょうか。
- 線香花火を詠んだ句を二つほど、情景がどれも鮮やかに浮かぶ映像的な句です。「庭に出て線香花火や雨あがり／星野立子」「庭石に線香花火のよべの屑／高野素十」。夕立後の夕食のあとでしょうか、子供にせがまれて今日も線香花火です。早朝庭の草取りを始めると、庭石の上に昨夜の線香花火の燃えかすが落ちています。昨晚のささやかな火祭りの跡。
- 8月は「火祭り」の季節。火は鎮魂のために焚かれ打ち上げられ流されるもの。送り火、花火、灯籠流し、様々な火祭りが夏に行われます。火はまた人を害するためにも燃え上がります。広島も長崎も8月です。敗戦の日も8月です。人は火を武器に使い人々を火だるまにし焼き尽くそうとするかと思えば、その火を鎮魂のためにもちいる矛盾した生き物のようです。
- 広島で燃やし続けられている平和の灯、各地で灯される鎮魂の火、ウクライナで飛び交う戦争の火。そして我が家の庭先で静かにはじける線香花火の火。夏の火は暑い夏に見合った熱量で、私たちに様々な思いを語りかけてくれるようです。

8・9月スケジュール

月	火	水	17	18	19	20
7	22 読書会 13時半から	23	24 映画会 13時半から	25	26	27
28	29	30	31 映画会 13時半から	9月1日	2	3 写経会 13時半から
4	5	6	7 映画会 お休み	8	9	10
11	12 読書会 13時半から	13	14 映画会 13時半から	15	16	17

読書会

8月22日

9月12日

(火) 13時半

写経会

9月3日 (日)

13時半

映画会

変則日程です

8月15日を過ぎるとなぜか夏も終わりに近づき名残惜しい気持ちになるのは今も昔も変わりません。まだ残暑の厳しい日が続きますが、それでもたまに吹く秋風は確実に秋の訪れを予感させ、夏野菜を片付けて秋野菜のために畑を耕す時期となります。子供の頃は夏休みの残りはあと何日と指折り数えながら夏にやり遺したことあれこれなどの思いが交錯して、少しセンチな気分になってしまったものです。これは大人になっても変わらない感覚のようで、夏に何か忘れ物をした気分秋を迎えることは人生の活動期に後悔を残し社会活動から人生の隠棲期を迎えてしまうようなものかもしれません。人の一生を少年、大人、社会人、定年引退、高齢者、後期高齢者のように年齢で区切ってその区分らしく生きることを求められるような生き方は自分の思考を縛られてしまうようで、私は同調しかねますが、盛夏が下りに向かう頃は、私にとっては少年の時でも高齢者の時でも、これからどちらに向かうのだろうということを意識せずにはいられない日です。

夏休みに話をもどすと、最近の夏休みと私の頃と過ごし方の違いに驚くばかりです。どちらがよいかという価値の問題ではなく日本人の社会や家族のあり方が大きく変化していることがこの違いに大きく現れているようです。かつての夏休みは学校に行かないだけで家庭で学校に行ったと同じように日課に従って規則正しい毎日を送ることが基本的な考えだったように思います。朝起きてまずラジオ体操、カードに出席のはんこを押してもらい午前中は涼しい内にドリル学習や読書、午後は友達とプールや虫取り、夕方はその日の出来事を絵日記に記して8時に就寝。今ほど猛暑ではなかったので日中は野球や相撲などで遊ぶ子供たちの声で溢れていました。ゲームもyou tubeもなかったけれど遊びには困らなかった記憶があります。そして二学期の始まる日に体操カードとドリル帳と絵日記と工作を提出です。みんな真っ黒に日焼けしていました。

一方現代の夏休みにここコリーナでは子供の声が聞こえることはありません。広い空地と雑木林が囲むこの地は子供が外で遊ぶには最適の場所と思われそうですが、子供たちはどこに行ってしまったのでしょうか。6年前からラジオ体操のはんこを押す役を勝手に引受けていますが、参加者は年々減り今年はまだ延べ7回ほど押しただけです。まれに自転車で部活に向かう中学生に出会いますが、小学生はほぼ皆無です。夏休みの子供は学校に行く代わりに学童保育に通っていたのです。両親共働きの家庭が殆どのため、朝子供を学童に送りそれから出勤、退勤時に子供を迎えに行き夕飯の準備です。ラジオ体操に連れて行く時間も子供のドリルや絵日記を見て上げる時間もないので出される宿題も少なくなります。親が家事をしている間に子供にはゲームやyou tubeのアニメを見せておけば静かにしているので楽ちん。親の生活時間に子供が合わせている内に就寝時間も9時、10時になってしまいます。夏休みは学校通いが学童保育通いになっただけです。学童は保育機関なので学校のように学習環境と規律を重んじた教育環境は望むべくもありません。夏休み中に家庭に求められていた学習や規律ある生活環境も親が忙しいため、困難な状況が今の夏休みのようです。

琉游舎では今年も8月13日にお盆施餓鬼供養を行いました。お盆は先祖供養をするための日本古来の風習で、由来は仏教とは全く関係ない行事です。一方施餓鬼は盂蘭盆経という中国で作られた偽経由来のもので貪り苦しむ餓鬼に対し飲食を施し、先祖や広く無縁の諸精霊を供養する法要です。日本人の民俗信仰の色合いが濃いローカルなお盆供養をする地方もあれば、寺院が主導して僧侶がお盆の行事を行う所もあるようです。琉游舎のお盆施餓鬼供養は仏教の根底にある永遠のいのちを次に繋げていくことで自分の先祖だけでなく生きとし生けるもの全てのいのちは自分のいのちと繋がっていることを自覚する日と考えます。自らの三毒^{註1}を省みるとともに生きとし生けるものすべてに思いを巡らし、布施して頂いた食べ物やお酒、自家製のナスやキュウリで作った馬や牛の似姿をお供えしていのちをつなぐ食べ物に感謝の気持ちを表します。この法要は仏教と古来の民俗信仰の混淆の形態をとっていますので、僧侶の私のよって立つ“仏教の枝葉末節を取り払い原理に立ち返って今の仏教を実践していこう”とする立場に矛盾しているように見えるかもしれません。

夏休みの過ごし方がこの60年近くの間大きく変化していったのは私たちがその変化を望み作り出していたからです。社会制度や法律や世論はその変化を後追いしているだけで、現実の変化には追いつけていないのです。あるいは政治や行政はその変化を見て見ぬふりをするか、変化は日本人のあり方に反する（昔はよかった）などと理屈を付け変化の波を押し戻そうとします。夏休みを一例に取りましたが、今地域で起きていることは全て通底しています。かつてお盆はイエ制度（本家を中心とした血縁の結合体）の中核をなす行事だったはずですが、お盆は先祖の霊を迎えるために一族が本家に集結し、イエの紐帯を確認する日だったのです。戦後80年ほどでそのイエ制度は崩壊しそれに伴い地縁や村落の共同体も生滅してしまいました。共同体（地域コミュニティ）が各イエの集合体によって成り立ち、相互扶助の関係にあったものが、今は各家が独立して紐帯も相互扶助も求めない求められない現実が地域の現場にはあるのです。自治会や育成会、老人会などの活動が成立しないことは現在の夏休みのあり方の変容と根底では相通じている現象なのです。

琉游舎のお盆施餓鬼法要、私の仏の弟子としての歩みはいつまで続くのでしょうか。私は人々が仏教に何を求めているのかを知り、その願いが私の仏教と交わる瞬間がある限りは原理に縛られることなく仏の弟子であり続けることができるでしょう。私は変化の波に乗ることで変化に竿をさすこと

でもなく、自己と他者の各々の変化の波を尊重しその変化が交わるときに
 そこに仏のいのちが生まれると信じています。それが諸行無常、縁起の世
 界を生きることではないかと夏の終わりに思い至ったところです。注1：三毒（貪・瞋・癡）